

## 活水女子大学看護学部に着任して

活水女子大学看護学部 学部長

野口 静子

この3月で、長崎みなとメディカルセンターで5年間の副院長兼看護部長の役割を終え退職しました。ですが、米倉先生からのお話があり、急遽この4月から活水女子大学看護学部長として就任することになりました。そして瞬く間に半年も過ぎてしまいました。

看護学校の閉校式は、当看護学部の開設から2年後の忘れもしない東北大震災の翌日の平成23年3月12日でした。2年間の大学の運営状況と長崎医療センターとの関係については、しばしば耳にしておりました。母校を閉校してまで大学を作る意味があったのかと看護学校の同窓生としては将来への期待薄と先行き不透明感を強く抱いておりました。閉校式の挨拶をすることになり「開校の意味するところ、同窓生の思いをしっかりと受け止めていただき、どうぞ、看護学部設置当初の双方の思いの実現に向けて活水女子大学と長崎医療センターとがより一層仲良く協力し合って、社会に認められる看護学部を作り上げていただきますことを、心から強く念じております」と話したことだけは覚えております。

私が平成6年に厚生省健康政策局看護課へ出向した当時、九州ブロックの看護学校長協議会の委員長をなさっていた国立南九州中央病院の櫻美院長と長崎医療センターの寺本院長が「国立病院療養所の看護のリーダーや高度・専門化する医療に対応できる人材を育てるために九州に看護大学を作りたい」と熱心に陳情にお見えになりました。この熱意に応え看護課では「21世紀少子・高齢社会看護問題検討会報告書」において具体的な方策として看護系大学・大学院の整備促進と合わせ国立病院・療養所附属の看護大学校（学位を授与できる）を整備することを明記して、実現に取り組みました。国立看護大学校は平成13年ナショナルセンター附属の位置づけで設置され1校のみに終わりました。当時30校あった看護系大学は平成30年には263校、大学院175校になりました。

国立病院機構に移行してからも、看護学校の大学化への期待は大きく、私立大学と提携して看護学部が開設されました。以前120校以上もあった全国の国立病院・療養所附属看護学校は統廃合、廃校も含めて現在は約30校になってしまいました。

活水女子大学看護学部は平成21年4月に、学生確保と同時に国立病院機構及び長崎医療センターの人材確保と質の高い看護職の育成を目的として開設し、看護学部は今年で10周年を迎えました。開設時、同窓生としては、大学院を設置して臨床の看護職員のキャリア支援ができることも期待していましたが、今の大学の懐具合ではまだまだ先のことのようにです。学生定員は一学年75名でほぼ充足しています。学生の偏差値は他大学と比較して高いとは言えませんが学習の仕方を学んでいないだけで、とても素直で優しい学生が多く教員の教育力にかかっていると思います。開設当初の教員は殆ど退職してしまい、教員の平均勤務年数は3年から4年です。国立病院機構からの3年間の期限付き教員（講師・准教授）2名の出向支援でなんとか大学の運営ができています。

当学部の開設当初、某教授から「大学は看護師を育てるのではなく看護学を学ぶところ、大学の教員が教育するので実習場を提供してもらえばよい。」と言われたと、某先輩がひど

く憤慨していたのを思い出します。

開学してからこの10年、急激な医療提供体制の変化や医療の高度・専門化に伴う新しい技術の導入等により看護実践内容は大きく変化しています。患者の重症化、ニーズの多様化、看護ケアの複雑化、在院日数の短縮化、地域包括ケアシステムの推進において回復期ケアが重要になり、専門性の高い看護師を求めるようになってきています。看護学部である以上、学生を「有能な看護の実践者（としての基礎的能力を持った人材）を育てる」ことを目指したいと思っています。

現在、厚生労働省でカリキュラム検討委員会が行われており平成21年に報告書がまとめられる予定です。井部俊子先生は、「教員が学生に『何を教えるか』は、『看護の現場で何が起きているか』を把握し、『起きていることに対処するには何が必要か』を特定してカリキュラムの枠組みとする作業工程が求められる。これからの看護教育のカリキュラム構築は、実践現場と教育現場との往来が必然となる。」と述べていらっしゃいます。これは、私たち国立病院機構の看護職員が、これから開設する看護学部にまさに期待し望んでいた姿でした。在職当時から九州ブロックの副学校長・教育主事協議会でも臨床と学校との相互研修を行ったり、看護技術については、現場と乖離しないよう臨床の看護職員と教員とが協議しながら講義・演習を行うなどの取り組みを行っておりました。この夏、長崎医療センターで2名の教員の臨床研修をさせていただきました。臨床の医療・看護の内容や看護師の業務を実体験することで、看護師の業務の大変さと同時に学生への指導の内容、指導のタイミングや方法について見直しができるようです。学生が今まで以上に学び多く、怖がることなく安心して実習できる環境を相互に協力して作ることができれば、開学時の目標の実現も夢ではないと思っています。これからより一層、長崎医療センターの皆様のご協力とご支援を得ながら、病院と大学とのユニフィケーションをしっかりと構築して、看護実践教育のレベルを向上させたいと思っています。よろしくお願いいたします。